

銅造阿弥陀如来坐像

日本の伝統文化の象徴として世界的にも有名な大仏は、その大ききさで見る者を圧倒し、その美しきで魅了してはいますが、その起源や歴史についての正確な情報がないために、謎めいた存在でもあります。

大仏は阿弥陀仏（「無限の光の仏陀」を意味するサンスクリット「アミターバ」）の像であると言われてはいます。現在の印相（手のかたち）は、阿弥陀仏が瞑想していることを示してはいますが、これは阿弥陀仏との関連性を強調するためにある時点で改作が加えられた可能性もあります。江戸時代（1600～1867年）の中期からは、正式に仏教の浄土宗の信仰の一部となり、東京・芝にある浄土宗の寺院・増上寺と関係があります。

浄土宗は北アジアおよび東アジアで広く信仰されている大乘仏教の主要な宗派のひとつであり、その起源はインドにあります。インドからチベット、ベトナム、中国、朝鮮へと広がり、そして最終的に日本に伝来しました。その教えは、現在の退廃した時代においては、初期の仏教の教義や実践はその効果のほとんどが失われているので、信仰者は阿弥陀に依拠すべきである、というものです。阿弥陀は自らを信じ、瞑想し、その名を唱える者をすべて西方浄土へと連れていくという誓いを立ててはいますとされます。浄土宗の重要な儀式は念仏です。そのもともとの意味は「阿弥陀の瞑想」という意味でしたが、やがて「阿弥陀の救済の力を信じ、その神聖な名前を唱えること」という意味に変わってきました。念仏は通常は「南無阿弥陀仏」と唱えます。

高德院の大仏は銅製で、高さ 11.3 メートルあり、重さは 121 トンです。日本の国宝に指定されています。中世の歴史によると、その鑄造は 1252 年に始まりましたが、仏師の名前は明らかになってはいません。もともとは大きなお堂の中に収められてはいましたが、14 世紀と 15 世紀に台風や地震によって建物は 3 回も倒壊しました。これらの災害の後、この像は野ざらしになり、寺全体も荒廃しました。江戸時代中期になって、ようやく像の修復と補修が行われ、寺も清浄泉寺高德院と改名され、念仏の寺院として浄土宗に組み込まれました。